

教員という仕事の魅力

松井 惇樹

1. 教員を目指したきっかけ

私が教員を目指したきっかけは、大学2年生での数々の経験だ。

自分の従兄弟たちが全員年下であったことなどから子供を相手にすることが多く、子供と接することがなんとなく好きで、教育関係の仕事に興味はあったが、大学入学時には、自分が本当に教員になるとは思っていなかった。

漠然と大学一年生の頃に教職課程を履修し始めたのは、将来の選択肢を増やすために教員免許を取得しようと思った程度の些細なきっかけによるものだった。

2年生となり、少しずつ教職の授業も本格化し、教員という仕事に興味が湧いてきた。そんな中、学習塾でのアルバイトを始め、児童生徒たちが今の教育現場においてどのような状態なのかを知ろうとしたところ、児童生徒に指導することの難しさをいやというほど思い知った。しかし、自分が苦勞して問題を説明し、生徒が理解してくれた時の嬉しそうな顔を見られたことで「教えること」の楽しさも知れた。

これらの経験から3年時には神戸市スクールサポーター制度を利用し、学校現場というものをより深く知ろうと思い、実際に参加しながら様々な経験を得るうちに、自分の中で教員の魅力が大きくなり、気づいたら教員を目指していた。このような教員を目指す気かけがあやふやであった私だからこそ話せる、教員を目指す上での取り組みを述べさせて戴こうと思う。

2. 教員を目指す上で取り組んでほしいこと

教員を目指す上では教員採用試験を受けることは避けられない。教員採用試験は自治体によって異なるが、教職・一般教養、各々の専門教養、面接、小論文対策や集団活動といった様々な知識や対策が求められる。今回は筆記試験以外に役立つような2つの私がした取り組みを紹介するので、ぜひ取り組んでみてほしい。

1つ目は、学校ボランティア（自分の場合は神戸市スクールサポーター）に参加していただきたいと思う。私は大学3年生から4年生までスクールサポーターとして参加したが、この経験が無ければ教員を目指していなかったかもしれない。

大学の授業において、教育制度や教育方法などの学習理論や指導方法を学習することはできるが、学ぶ事と実際に教育現場を見て経験することは大きな違いがある。

実際の学校現場に行くと、行事の運営の裏方、クラスごとの特色、教材作り、具体的な学級経営といった紙やデータだけでは得られない経験を得ることができる。現場の先生と自分ならどのような授業をするか、見学した授業について議論したりすることもあり、授業製作にも大きなヒントを得ることができた。

教育現場でしか経験できないことを学生のうちから知れることは、教員採用試験において2次試験の面接や小論文などで非常に役立つと思う。また、私は教育実習が10月から始

まる予定だったため、1次試験の面接の対策としても有効だと考える。本来の学部の授業に加えて教職課程を履修することで時間割に空きがあるかは人によると思うが、自分のように時間割を調整してでも是非参加し、多くの経験を得て2次試験などに活かして欲しい。

2つ目は、教職教育サポート室を利用することである。神戸学院大学には両キャンパス共に教職教育サポート室があり、毎日いずれかの教科のスペシャリストの指導員の先生がいらっしゃる。そのため、授業の課題に困ったときや教育実習などの授業準備へのサポートなどはもちろん、教員採用試験合格に向けて様々な取り組みをしてくださっている。

私は2年生の後期の頃から通い始め、3年生の教員採用試験を受けると決意した時から、ほぼ毎日通うようにしていた。自分の専門科目である社会科はもちろん、教員採用試験における一般教養科目の分野で出題される英語や国語、教職教養科目についても様々な先生に助けていただいた。また、サポート室に行けば、同じ目標を持った友人と切磋琢磨しながら勉強できる雰囲気もあり、複数人いるからしかできない集団討議やグループワークの練習ができる。これはサポート室を利用しなければ中々練習することができず、かつ多くの自治体の1次試験において課される集団での試験対策に役立つため、ぜひ隙間時間にでも積極的にサポート室を訪れてほしい。

3. 教員を目指す皆様へ

生徒の成長を間近で感じ、共に成長することができる教員という仕事は、何事にも変え難い魅力があると考えている。その魅力を糧に頑張った4年間だった。またここまで記した通り、スクールサポーターやサポート室の先生、教職課程の先生方、共に頑張ってきた友人たちの助けも大きいと思う。これだけの環境に恵まれながら、自分の夢を叶えることができたため、自分の経験を拙いながらも述べさせて頂いた。

ここまで読んで頂いた方に少しでも教員の魅力が伝わり、教員になるためにどのような取り組みをしたらいいか考える選択肢を与えられていれば嬉しい。